

# 琉球大学学術リポジトリ

中国語における使役構文の特徴とその分類：  
「使」を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2019-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, ひろみ, Kinjo, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44300">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44300</a>

# 中国語における使役構文の特徴とその分類

## －「使」を中心に－

金城 ひろみ

### 一、はじめに

「使役構文」、これはどの言語にも存在しうる文法形態である。「～させる」という意味を表す文法上のルールであり、日本語のみならず、英語、中国語など世界の言語において、普遍的に見うけられる特徴である。中国語の使役構文は、「使」・「讓」・「叫」などの動詞が助動詞的役割を担い、使役構文を構成するフォームと、決められたマーカーではないが、使役の意味を表すことのできる「派」、「要求」、「勸」などのような動詞で表すことができる。

本稿では、その中でも、有標性のある「使」に焦点を当てる。「使」は、「讓」や「叫」に比べ、文法書などではあまり詳細に説明されていない。「使」はもともと古文（漢文）における使役構文に始まり、現在でも書面語として多くみうけられ、「使」独自の特徴が存在する。特に書面語として多く使われるという点から、文学作品等の用例収集には適しており、「使」の文法特徴、分類についてより明確に分析することができる。また日本の大学で使用される中国語テキストや文法書では、「使」の用法が詳細に記されていないため、その用例収集によって、「使」の用法と分類を提示したい。

### 二、「使」を用いた使役構文の教授法

#### 1、使役構文の定義

中国語における使役構文について述べる際に、まず「兼語文」の構造を説明しなければならない。「兼語文」とは、二つの動詞句から成り立つ「動詞述語文」の一種で、ある一文において、前部分の目的語（賓語）にあたる部分が、後ろの主語を兼ねている構造の文である。前部分の目的語（賓語）が後ろ部分の主語を兼ねるため、それを「兼語」と言い、その構造を持つ文を「兼語文」と定義する。

例) 老闆叫他去買東西。(ボスは彼を買い物に行かせる。)

→この文は、構造上、2文に分けることができる。

老闆叫他 (ここでの「他」は「賓語」＝動作客体)

他去買東西 (ここでの「他」は「主語」＝動作主体)

上の例文では、「老闆」が文の主語となり、動作の命令者になる。「他」は、その命令者「老闆」の対象となり、かつ「去買東西」の動作の実行者となる。この場合、「他」は、「老闆」からの役割と「去買東西」の役割を兼務しており、それがまさに「兼語」であり、この文の構造を「兼語文」と呼ぶ。

では、この「兼語文」を踏まえた上で、使役構文について説明する。使役構文は、「AはBにCさせる」という意味を表すため、一つの文を「AはBに」という部分と、「BにCさせる」という部分に分けて考えることができる。その時、前者では「B」が対象(賓語)となり、後者では「B」は主語となる。どちらにも「B」が関与するので、その「B」が「兼語」しており、「兼語文」の構造になると言える。これらの構造をもとに、中国語の使役文の種類をまとめてみよう。

中国語の使役構文では、使役を表す使役マーカーが存在する。主に「叫」、「讓」、「請」、「使」、「令」の5つである。どのマーカーを用いても、同じ文法構造をとり、使役文を作ることができる。しかしながら、どのマーカーを用いるかによって、文意がかなり異なってくる。それは、それぞれのマーカーが持つ意味、使用範囲、使用方法が異なるからである。

まず、「叫」、「讓」は、使役マーカーの中では、使用頻度が高い表現である。基本的に、目上の人が目下の者に使う表現である。両者は入れ替えて使うこともできるほど、使用方法に大きな差はないが、一般的に、「叫」は話し言葉で使われることが多く、命令的に使う場合や、くだけた表現が多い。また「讓」は、話し言葉でも使われるが、書き言葉としても使用できる。

例) 叫他拿來。(彼に持って来させなさい。)

→命令的な表現。

讓他自己想想。(彼に自分でよく考えさせる。)

→話し言葉、書き言葉、両方に使用できる。

また「讓」は、書き言葉でも、特に公式の場での発言や正式な発表などをおこなう際にも使用できる。

例) 首先讓我向同志們問好。

(まずわたくしから皆さまにご挨拶を述べさせていただきます。)

→「讓」は基本的に、目上の人から目下の者への表現であるが、この場合、敬意を表すために、目上の人の子体が省略されている。

「讓」の場合、目下の者から目上の人へ使う場合もあり、これは、一般的な使役ではなく、謝罪表現の一つであり、丁寧な「使役」表現と言える。

例) 讓您破費了。(ごちそうさまでした。／ご散財をかけました。)

→この場合、目下の者が目上の人にごちそうになるなど、お世話になる、面倒をかける状況の時に使われる。ここでは、「您」に敬意を表すために、主体である「我」を省略している。

この「叫」、「讓」は、以下に挙げるほかの使役マーカーと異なり、受け身表現においても使われるマーカーであるため、文意を注意深く読み取らねばならない。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 「叫」、「讓」の使役構文と比較をするため、受け身構文の例を挙げることにする。

例) 自行車叫哥哥騎到學校去了。(自転車は兄に学校へ乗って行かれてしまった。)

肉全讓他吃了。(肉は彼に全部食べられてしまった。)

→この2つの例文は、「叫」と「讓」を用いた受け身文の典型的なフォームを採っているが、もう一つの受け身マーカー「被」と異なり、マーカーのすぐ後ろにくる動作主を省略することはできない。

次に、「請」の使役表現であるが、これは一種の謙讓表現である。中国語は、日本語の「尊敬語」、「謙讓語」、「丁寧語」のように明示的な敬語表現があるわけではないが、ここでの「請」のように、意味上使われていている表現もある。「請」は、一般的な使役の「～させる」というよりも、「～するよう頼む、～してくれるよう言う」という意味で使用される。また使用される対象として、目上の人やまだ親交の深くない人、初対面の人などが挙げられる。

例) 快請她進來。(早く彼女に入ってもらってください。)

→動作としては、「彼女を入らせる」という使役だが、敬う対象のため、「請」を用いて、「～してもらおう」という意味を明示している。

さらに、「令」の使役表現であるが、これは上述した3種とは異なり、本稿のテーマの「使」の用法、性質と近い。人を意図的に動かして、何らかの動作を「させる」のではなく、ある原因によって、結果的に状況、感情などに変化を及ぼす場合に使う表現である。そのため、特に「令」のあとには、感情や気持ちを表す表現がくることがほとんどである。また、よく比較対象に出される「使」との違いは、この「令」は、「使」よりもさらに文語的、書き言葉的である。

例) 令人興奮。(人を興奮させる。)

→「令人～」という表現が一般的で、「令」のあとに具体的な人名、代名詞などではなく、「人」と表現することで、その後ろに表される感情などを客観的に表現することができる使役表現である。

では、本稿のテーマである「使」は、上述した4種の使役表現と比べて、どのような相違点があるのだろうか。また現在の中国語教育で使用されるテキスト、文法書などではどのように説明、表現されているのだろうか。次節であわせてまとめていくことにする。

## 2、テキスト、文法書における「使」の説明

前述したとおり、中国語において、有標の使役表現は、大きく5種に分けられる。4種は前節で説明したが、本稿のテーマである「使」については、まずこの「使」の表す特徴、使用範囲などを記すことにする。

「使」は、「叫」、「讓」、「請」などと異なり、動作的なことを強いる表現ではない。基本的に、非動作的な状態を表し、積極的な使役表現ではないと言える。これは、前節の「令」の性質と似ており、「使」の場合も、ある出来事が原因で、自然にある結果に至ることを表している。この「使」は、一般的に、何らかの状態、心理活動、変化を表し、やや書き言葉的な表現であるが、「令」に比べると、話し言葉においても使われる。

例) 他的技術使我佩服。(彼の技術は私を感心させた→彼の技術に私は感心した。)

→「使」の前で述べられていること＝「彼の技術」が原因となって、「使」のあとの「我」の感情に「感心する」という変化をもたらしている。これは、前節で述べた「AはBをCさせる」という使役構造の兼語文のフォームと合致する。

では、この「使」を用いた使役構文を現在の中国語教育ではどのように説明しているのだろうか。

現在、日本では数多くの中国語学習テキスト<sup>2</sup>や文法書<sup>3</sup>が販売されている。その中でも、テキストの多くは日本の大学における中国語科目を対象とした学習者、時間、項目が想定され、設定されている。一般的には、週に2回(1回の講義で90分)、1年間で60回ほどの講義を想定し、テキストは編まれている。近年では、大学それぞれのニーズに合わせた、週に1回、年間30

---

<sup>2</sup> 本間史・孟広学(2007)、劉穎・喜多山幸子・松田かの子(2008)、尹景春・竹島毅(2010)

<sup>3</sup> 守屋宏則(1995)、劉月華・藩文娛ほか(1996)、瀬戸口律子(2003)、松岡榮志・古川裕[監訳](2004)

回の講義に合わせたテキストや、回数にこだわらず、テーマを設定し、使用する時間数は担当者に任せるといようなテキストも増えている。それは、大学進学者の人口の減少に伴い、また日中関係の影響を受け、中国語学習者が減りつつあるという現実と密接にかかわっている。そのため、従来通り、中国語科目を開設することが困難な大学も少なくない。その現状をいくらか改善するためにも、中国語科目自体に工夫をこらし、受講生を増やすという策を考える大学も増えてきた。そこで、テキストの多様性が求められてきているのである。

そこで、基本的な文法項目の学習について、焦点を当ててみよう。これまでと同じような対象で編集されたテキストにおいては、後学期に取り扱う内容として、使役構文が採用されている。週 2 回、年間 60 回の講義形式であれば、たいてい 40 回目以降あたりに出てくる文法項目である。それ以前には、基本文型である「名詞述語文」、「形容詞述語文」、「動詞述語文」や「有」を用いた文、「連動文」<sup>4</sup>などは既習であることが前提である。

実際に、大学 1 年次に使用しているテキストをいくつか比較してみた。<sup>5</sup>しかしながら、使役構文、または兼語文の項目で説明されている内容は、「讓」または「叫」を用いた構文説明であり、「使」に関する説明はほぼないに等しかった。テキストによっては、「使」の使役表現について全く記載されていないものもある。ささやかながらも説明が施されているテキストといえども、中心の説明は、「讓」と「叫」の使役表現やその例文であり、注意書きとして、「これらの使役表現のほかにも、‘使’‘請’‘令’なども使役を表す」と添えられる程度である。または、「‘使’は使役表現の中でも、書面語（書き言葉）である。」と書かれるものもあった。

また文法書においては、著者の編集構成の方向性がそれぞれで大きく異なるため、テキストよりその記載表現に差異が見うけられた。

---

<sup>4</sup> 連動文とは、2つ、あるいは2つ以上の動詞及び動詞句が、1つの文の中で、同一の主語に連なる対等の述語となることのできる文のことを指す。

(例) 我去圖書館看書。(私は図書館へ行って、本を読む。)

<sup>5</sup> 尹景春・竹島毅 (2010)、本間史・孟広学 (2007)、劉穎・喜多山幸子・松田かの子 (2008) などを参照。

日本語と同様に、中国語においても、使役構文と受け身構文は似て非なる文法項目である。多くの文法書において、受け身構文は、単独で項目が立てられ、その文法の意味説明と例文が丁寧に記載されている。中でも受け身表現のマーカである「被」については、必ず詳しい説明が加わる。それに比べ、受け身構文と同じ動詞を共有して、有標マーカとして使用しているにもかかわらず、使役構文の説明は極端に少ない。使役に関する説明がある場合でも、独立した文法項目ではなく、「兼語文」の文法項目の中で、一つの例として使役を用いた文を紹介する程度である。その使役構文の説明においても、大方の文法書では「叫」、「讓」が中心で、「使」の説明は1行ほどである。ただ、少数ではあるが、「使」に関して細かい説明と、「使」と「叫」、「讓」の違いについて記した文法書もある。<sup>6</sup>

このように、各テキスト、文法書において、使役構文に関する記述には、ばらつきが見うけられる。それは、その文法項目の重要度、また教授法すべき順序にも関わってくるであろう。さらにその一因に、使役表現「使」を用いた使役構文における研究分析の不足もあると言える。そこで、次章では、「使」の用例収集から得られた結果をもとに、具体的な用例を挙げながら、「使」の使用範囲の分類をまとめ、現在の中国語教育における教授法につなげていくことをねらいとする。

### 三、「使」の用例分析

上述してきたように、使役構文の基本は、「AはBをCさせる」という意味を成すが、その際、使役マーカを境目にし、「A」と「B」にどのような性質のものがくるのか、用例から確認する必要がある。また一般的に、「使」を用いた使役構文において、「C」の部分が、感情、気持ち、変化を表す形容詞や動詞が多くみられると言われているが、その点に関しても、用例から分類する上で、分析しなければならない。

まず、使役動作は、人同士、人と事柄との関係性が深い。中国文学作品か

---

<sup>6</sup> 守屋宏則 (1995)、285-292 頁



ら収集した用例をもとに、以下のように「人」・「事柄」を中心に分類し、用例を挙げ、解説を加えることとする。

1、「人」→「人」（「人」は「人」を～させる）

- (1) 孔乙己是這樣的使人快活，可是沒有他，別人也便這麼過。（『孔乙己』54頁）<sup>7</sup>

（孔乙己は、このように人々を愉快にさせた。しかし、彼がいないからといって、ほかの連中がどうということはなかった。）

- (2) 現在你大嚷起來，驚起了較為清醒的幾個人，使這不幸的少數者來受無可挽救的臨終的苦楚，你倒以為對得起他們麼？（『呐喊』34頁）<sup>8</sup>

（今、あなたが大声を出して、まだ多少意識のある数人を起こしたとすると、この不幸な少数の者に、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えさせることになるが、それでも気の毒と思わなかね。）

- (3) 我回船的時候，正看見他們在岸上行人工呼吸，使他吐水，他倒漸漸地蘇醒轉來了。（『残春』70頁）<sup>9</sup>

（私が船に戻るとき、ちょうど彼らが岸辺で人工呼吸を行っているのを見た。彼に水を吐かせ、なんと次第に彼は生き返ってきた。）

- (4) 並且我也很傷心，我無能使他了解我而敬重我。（『莎菲女士的日記』254頁）<sup>10</sup>

---

<sup>7</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫（2002）、魯迅（作）・竹内好（訳）（1955）

<sup>8</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫（2002）、魯迅（作）・竹内好（訳）（1955）

<sup>9</sup> 丁玲（2013）

<sup>10</sup> 丁玲（2013）

(そうしてまた私もとても傷ついた。自分が彼に私を理解させ、尊敬させる能力がないことに。)

上に挙げた4文は、ともに「人」が「人」にさせる、というフォームで揃っている。

(1) は、心理活動を表しており、「使」を用いる使役構文において、最も典型的な文の種類である。(2) は、心的なある状態への変化を表しており、(3) は身体的なある状態への変化を表している。(4) は、何らかの状態(ここでは心理活動面でもある)を示している。「使」を用いた使役構造では、「使」のすぐあとにくる動作主が「人」であることが多いので、「人」が「人」にさせる、というグループは、用例収集の上でも多く見うけられた。また、分類の際に、明らかに「人」だとわかる、人称代名詞の場合には言うまでもないが、「人」の身体の一部の場合も、今回の分類においては、この「人」が「人」にさせるというこのグループに分類した。

## 2、「事柄」→「人」 (「事柄」は「人」を～させる)

- (1) 然而我雖然自有無端的悲哀，卻也並不憤懣，因為這經驗使我反省，看見自己了：就是我決不是一個振臂一呼應者雲集的英雄。 (『吶喊』26頁)<sup>11</sup>

(しかし私は、自分でもわけのわからぬ悲しみを抱いていたとはいえ、憤る心はさらになかった。なぜなら、この経験が私を反省させ、自分を見つめさせたからである。つまり私は、腕を振り上げて叫べば呼応するものが雲のように集まってくるほど英雄ではないのだ。)

- (2) 你深夜的呻吟，使我想起了許多往事。 (『莎菲女士的日記』超人8頁-1)<sup>12</sup>

<sup>11</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫(2002)、魯迅(作)・竹内好(訳)(1955)

<sup>12</sup> 丁玲(2013)

(あなたの真夜中のうめきが、私にたくさんの昔の出来事を思い出させた。)

- (3) 看哪，他飄飄然的似乎要飛去了！

然而這一次的勝利，卻又使他有些異樣。他飄飄然的飛了大半天，飄進土谷祠，照例應該躺下便打鼾。（『阿 Q 正傳』第 4 章 戀愛的悲劇 47 頁）<sup>13</sup>

(見よ、彼はふわりふわりと、今にも空へ舞い上がりそうではないか！  
しかしながら、今回の勝利にかぎっては、かえって彼を異様にさせた。  
彼はふわりふわりと長いこと舞ってから土地廟に舞いもどった。普段なら横になるとすぐに高いびきだが、この晩は寝つきが悪かった。)

- (4) 未莊人都用了驚懼的眼光對他看。這一種可憐的眼光，是阿 Q 從來沒有見過的，一見之下，又使他舒服得如六月喝了雪水。（『阿 Q 正傳』第 7 章 革命 57 頁）<sup>14</sup>

(未莊の人々は、おびえた眼で彼の方を見た。この種の哀れっぽい眼は、阿 Q はこれまで見たことがなく、それをひとたび見ただけで、また真夏の 6 月に雪水を飲んだように彼をずっと気持ちよくさせた。)

今回の用例収集において、「使」を用いた使役構造が多かったグループは、「事柄」は「人」にさせるというこのグループである。「使」のすぐ後ろにくる動作主が「人」であることは、上の分類と同じであるが、その動作を行わせる主語の部分に「事柄」がくる使役構造は文学作品において大変多く見られた。これは、文学作品における、物事の描写、比喩表現などの特徴に関わっていると言える。情景を表す際に、比喩を用い、抽象化しながら、その

<sup>13</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫（2002）、魯迅（作）・竹内好（訳）（1955）

<sup>14</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫（2002）、魯迅（作）・竹内好（訳）（1955）

表したい実態を読み手に想像してもらうには、使役表現を駆使することで、作品の味わいが出てくる。また具体的な事物、事柄によって、「人」が心的、または身体的に動かされる時に、この「使」を用いた使役構文で表されることが文学作品では多い。これは「使」を用いた使役構文が書き言葉として多く採用されている証拠である。

ここでの用例のうち、(1)(3)(4)には、「この～」という表現で「事柄」が表されているので、具体的な何かが明示されている。その結果、動作主である「人」がどうなったのか、ということが後半部でこれも同様、具体的に明示されている。また(2)では、「あなたの真夜中のうめき」を「うめいたこと」という「事柄」として捉え、この「事柄」は「人に」させるというグループに分類した。「人」の身体や心、一部と明らかにわかる場合は、上記の「人」は「人」にさせるグループの方に分類したが、ここでの(2)は、その「事柄」によって、「私」にある心理活動を行わせたことが明らかであるため、ある「事柄」が「人」を変化させたということで、このような分類になった。

### 3、「人」→「事柄」(「人」は「事柄」を～させる)

今回の用例収集では、このグループの用例を現時点では探すことができなかった。ある「事柄」を「人」によって、変化させるという場合、使役ではなく、能動的に表現されることが多いのではないだろうか。あえて受け身構造や使役構造にする必要もなく、むしろ能動的に表現する方が、その文意をきちんと直接的に表わすことができ、書き手の意図が伝わる人が多いのである。そのため、このグループの場合、使役構造を用いずに表わす文が一般的ななのである。

### 4、「事柄」→「事柄」(「事柄」は「事柄」を～させる)

- (1) 因為這些幼稚的知識 後來便使我的學籍列在日本一個鄉間的醫學專門學校裡了。

(これらの幼稚な知識のおかげで、のちに私の学籍は、日本の医学専門学校に置かれることになった。) (『呐喊』18頁)<sup>15</sup>

- (2) 所謂回憶者、雖說可以使人歡欣、有時也不免使人寂寞、使精神的絲縷還牽著已逝的寂寞的時光、有什麼意味呢、而我偏苦於不能全忘卻、這不能全忘的一部分、到現在便成了《呐喊》的來由。(『呐喊』自序 8頁)<sup>16</sup>

(思い出というものは、人を楽しませるものであり、時に人を悲しませないでもない。精神の糸をすでに過ぎ去った寂寞の時に繋がらせたとして、またどのような意味があるのだろうか。私はことさら全てを忘れられないことが苦しく、この忘れられない一部分が、今になり『呐喊』のいわれとなったのである。)

最後のこの「事柄」は「事柄」にさせるというグループであるが、これも少しだけ用例を確認することができた。(1)では「これらの幼稚な知識」という具体的な「事柄」が、「私の学籍」という具体的な「事柄」に使役行為を促している。(2)では「思い出というもの」という抽象化された、一般化された「事柄」が、「精神の糸」という表現で「私」の内部を抽象化し、そこへ使役行為を促している。この用例は両者ともに、「事柄」は「事柄」にさせるという構造を担っているが、前者は具体的な状況を使役的に表現し、後者は抽象化することでそのテーマを浮き彫りにするという狙いがある。このグループにおいては、このように具体性と抽象性を表わす文がより明確に区別できるため、さらに分類を細かくすることができるであろう。

<sup>15</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫(2002)、魯迅(作)・竹内好(訳)(1955)

<sup>16</sup> 丸尾常喜・蜂谷邦夫(2002)、魯迅(作)・竹内好(訳)(1955)

#### 四、おわりに

本稿では、中国文学作品より「使」を用いた使役構造文の用例を収集し、その構造から大きく4つに分類することができた。この使役構造文では、「～させる」という内容で、書き言葉にも多くみられる、という文法説明がほとんどであった。使役構造文でも、他の使役マーカーである「讓」や「叫」の場合は、より詳しい文法説明が、テキストや文法書にも多く施されており、中国語を教える場においても丁寧に説明されることが多かった。そのため、「使」を用いる使役構文の場合、その細かな機能や対象、表現方法などを知る機会も少なく、学習者もこの「使」を用いて作文することもそうたやすいことではなかった。

今回の用例収集によって、「何が何へはたらきかけたのか」という視点でこの使役構文を分類できたことは、「使」を用いた使役構文のより詳しい説明、より深い理解に繋がると確信できる。「使」を用いた使役構文を単に「何らかの状態、心理活動、変化を表し、書き言葉としても多くみられる」という説明だけにとどめるのではなく、その中でも、「何が何へはたらきかけているのか」という視点、分類も加えることで、中国語学習者の習得率も伸びることは想像に難くない。それに伴い、中国語教育においても、テキストや文法書作りの際に、どの段階でこの「使」に関する説明、解説を加えるべきか再検討する機会を設けることができるのではないだろうか。

本稿において採用した用例は、主に中国大陸出身の著者によって書かれた中国文学作品であるが、今後は、書き言葉的な表現を好む者が多い、台湾出身の著者によって書かれた文学作品からも用例収集することで、また用例、分類の幅が広がると期待できる。今回の4分類においても、今後はそれぞれのグループにおいて、どのような性質の動詞を用いて、その動作を行わせているのかなど、各グループをさらに細かく分類し、継続的に分析していく。

## 五、参考文献（出版年代順）

- 魯迅（作）・竹内好（訳）（1955）、『阿 Q 正伝・狂人日記』、岩波書店
- 佐藤里美（1986）、「使役構造の文—人間の人間にたいするはたらきかけを表現するばあい—」、『ことばの科学（第1集）』、むぎ書房
- 佐藤里美（1990）、「使役構造の文（2）—因果関係を表現するばあい—」、『ことばの科学（第4集）』、むぎ書房
- 守屋宏則（1995）、『やさしい くわしい 中国語文法の基礎』、東方書店
- 劉月華・藩文娛 ほか（1996）、『實用現代漢語語法』、師大書苑
- 丸尾常喜・蜂谷邦夫（2002）、『中国の言語文化—魯迅と莊子』、放送大学教育振興会
- 瀬戸口律子（2003）、『完全マスター中国語の文法』、語研
- 松岡榮志・古川裕〔監訳〕（2004）、『現代中国語総説』、三省堂
- 本間史・孟広学（2007）、『中国語ポイント55』、白水社
- 劉穎・喜多山幸子・松田かの子（2008）、『1冊目の中国語 講読クラス』、白水社
- 尹景春・竹島毅（2010）、『中国語 つぎへの一歩』、白水社
- 莫言（2012）、『諾貝爾文学獎 獲得者莫言作品系列 紅高粱家族』、上海文芸出版社
- 丁玲（2013）、『20世紀中国文学争議 莎菲女士的日記』、二十一世紀出版社
- 沈從文（2013）、『辺城 沈從文小説菁華』、湖南文芸出版社
- 周作人 等（2016）、『過日子』、北京聯合出版公司